

# 隱岐院

一名 隱岐物狂

世阿弥作

前

ワキヅレ（男）人買の男

シテ 狂女

後  
ワキ 僧

ヲカシ 里人

シテ 前に同じ

地は 前は山城 後は隱岐

季は 秋

男詞

「かやうに候ふ者は。隠岐の国より出でたる人商人にて候。我此程は都に候ひて。数多の人を買ひ取りて候ふ間。近日に罷り下らばやと存じ候。今日は東寺辺作道のあたりにて人を買はゞやと思ひ候。

シテ次第  
「忘れは草の名にあれど。く。忍ぶは人の面影。

詞  
「是は鳥羽のあたりに住む女にて候。さても我母に後れ父一人に添ひ参らせ候へば。去年の春御遁世にて候ふ程に。あまりにたづきもなく候へば。都に

知る人の候ふを尋ねて参らばやと思ひ候。

歌

「頃もはや。ふくる鳥羽田の秋の山。く。露も時雨もせきあへぬ。衣手寒き夜もすがら。寐られぬまゝに思ひ立つ。都はいづくなるらん。く。

シテ詞

「いかにあれなる人。都へはそなたにて候ふか。

男  
「是は田舎人と見えて候。いや都へはこなたがよく

候ふ程に。こなたへ御出で候へ。

シテ

「あら何ともなや。都へは此道こそ人も上り候へ。

こなたにて有りげに候ふものを。

男

「いや／＼あしくあしらひて。声を立てばかなふま  
じと。髪を取つて引き伏せて。

地「綿轡をむずとはめ。畜生道に落ち行くかと。泣く  
声だにも出でざれば。心に人間はありそ海の。隠  
岐の国へと志し。山陰道に急ぎけり。／＼。(中入)

ワキ詞「是は諸国一見の僧にて候。我國々を見廻りて候ふが。  
此程隠岐の国に候ひて。所々を見廻りて候。又承  
誰か渡り候。

ヲカシ「何事を仰せ候ふぞ。

り及びたる後鳥羽院の御廟に参らばやと思ひ候。

ワキ「是は諸国一見の者にて候ふが。此所初めて一見仕り  
候。承り及びたる後鳥羽院の御廟を教へて給はり  
候へ。

ヲカシ「是は思ひもよらぬ事を御尋ね候ふものかな。こな  
たへ御出で候へ教へ申し候ふべし。又こゝに面白き

事の候。女物狂の候。此御廟へ毎日参り。後鳥羽院の御事を曲舞に作りて歌ひ候ふは。是非もなく面白う候。暫く此所に御座候ひて。御覽ぜられ候へ。

ワキ「懇に承り候。近頃祝着に存じ候。御廟に参り又彼物狂をも見うずるにて候。

シテ「あら遅なはりや今日はまだ。彼御廟へも参らぬよなふ。わらはゝ都鳥羽の者。父に捨てられかやうになる。此君の古へも。後鳥羽院と申すなれば。

御なつかしさ故郷の恋しさ。君も昔や忍び給ふ。されば古へ都より。送り給ひし言の葉にも。思ひやれ聞かぬを聞きてさびしきは。荒磯波の暁の声。思ひでや。交野の御狩かり暮らし。

シテ「帰る水無瀬の山の端の月。いつか又我も帰りて水無瀬川。

地「鳥羽田の月の秋の山。

シテ

「手向の花のかぞいろあらば。

地「遅々たる春にあはせてたべ。此度は。ぬさ取りあ  
へず手向山。／＼。紅葉の錦春はまた。花衣白妙  
の。浦風や。浜松が枝の折々に。声そへて沖津浪。  
海原の。緑の空も春めきて。雁金の如くに。故郷  
にかへしおはしませ。／＼。

ワキ詞「夫れ世間の無常は旅泊の夕にあらはれ。生死の転  
変は。山林のちまたに知る。

詞  
「此君の古へも。後鳥羽院と申すなれば。我等が故  
郷も一しほに。御なつかしき心地して。かたじけ  
なうこそ候へとよ。

シテ詞  
「不思議やな是なる旅人の口づさび給ふ言の葉に。  
後鳥羽院の昔を思ふ君が代の。跡なつかしき詞か  
な。

ワキ「君も此君は。後鳥羽院とて君の代にも。御名は越  
えにしすべらぎの。

シテ「すべら代なれど力なく。因果の来る時代とて。

ワキ「兵の乱れに襲はれつゝ。鳥羽田の面を立ちはなれ  
て。

シテ「こゝまでも名を刈田の郷に。

ワキ「露ふるびたる草の庵を。

シテ「見るにつけても昔語を。

二人「思ひぞ出づる西行法師が。讃岐の院の御廟に参  
りて。

地「よしや君。昔の玉の床とても。く。かゝらん後  
は何にかはせんと。よみ置く露の草村や。昔の玉  
のゆかならん。實にや海人の苦。松の垣ほの八重  
葎。栄えん君の御宿りに。なるべき事か定めなや。  
く。

ヲカシ

「いかに御僧へ申し候。さきに申しつるは此文物狂  
の事にて候。いつもの如く鳥羽殿の御事を歌はせ  
て聞かせ申し候ふべし。

ワキ  
ヲカシ  
「いかにも面白う狂はせて御見せ候へ。

「なふく鳥羽殿の御事を歌ひて御聞かせ候へ。こゝに旅人の御入り候。御聞きありたきと仰せ候へ。此

烏帽子をめして。面白う歌うて見せ申され候へ。

シテ  
「實にく是も狂言綺語を以て。讚仏転法輪の誠の道にも入るなれば。いざや歌はん此君の。昔を今にかへす浪の。

地  
「隠岐の海の荒磯の。く。新島守は誰やらん。

シテ  
「春風に磯山桜咲くのみか。

地  
「沖には浪の花ぞ散る。

シテサシ  
「承久三年七月八日。時氏鳥羽殿に参じて申しけるは。世はかうにて渡らせ給ひ候ふなり。御出家なくては叶ふまじと。情なく申し上ぐれば。

クセ  
「力及ばせ給はずして。やがて御ぐしをおろされたり。綺羅の御姿を引きかへて。衲衣を御身に奉り。御似せ絵を書かせ給ひて。七条の女院に参らせら

る。女院御覽じあへずして。修明門院と。御同車あつて鳥羽殿に。御幸ならせ給ひて。庭上に御車を。立てられければ一院も。御簾をかゝげて。御顔ばかりさし出だして。たゞとくく。御帰りあれとばかりにて。やがて御簾をおろされけり。

シテ  
「ほどなき一目の御契り。

地「御身も心も燃えこがれ。煙の内の苦しびも。かくやと思ひ知られたり。さらでだに悲しかるべき。

初秋の夕暮に。あはれすゝむる折節もあり。秋の山風吹き落ちて。御身にこそはしみ渡れど。隱岐の海の荒磯の。新島守は誰やらん。御出家の後は。かくとも鳥羽殿に。渡らせ給ふべきやらんと。御心やすく。思し召さるゝ処に。時氏又参じて。隠岐の国へ流し奉る。御供には。男女以上五人なり。前蹕の警衛もなく。百官の扈従するものなし。庶人の旅に異ならず。道すがらの御有様。誠にあは

れなりけり。さても此島に。渡らせ給ひて海士の郡。刈田の郷といふ所に。御座をかまへたりければ。只海人のすみかに異ならず。昔は蟠洞紫山のうちにして。春秋を送り迎へて。樂しう尽くる事なし。

シテ  
「今は苦屋の。

地  
「庇蘆垣の。月洩り風もたまらねば。昼もつらし夜もまた。女御更衣の其拝所もなく。月卿雲客の

拝すもなし。只懐旧の御涙に。まどろませ給ふ。

夜半もなけれどこの。浪只こゝもとに。立ち来る心地して。須磨の浦の昔まで。思し召し出でらるゝ。われこそは。新島守よ隠岐の海の。荒き浪風心して吹けの。御詠もあはれにて。感涙を押ふる。

シテ  
「袂も舞の袖。

地  
「汀は浪の。

シテ  
「雪をめぐらす。

地  
「桜衣の。

シテ  
「袂も袖も。

地  
「いづれも白妙の白重ね。御僧の衣は墨染の夕の。  
色こそかはれよくく見れば。不思議やな親と子  
の。別れて年を故里の。鳥羽の恋塚恋ひ得て。父  
に逢ふぞうれしき。是も思へば親と子の。契り久  
しき玉の緒の。長き別れとなりもせで。又めぐり  
うれしさよ。